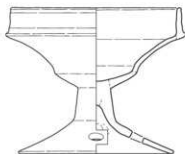


藤原京左京二条四坊
出合・膳夫遺跡

—平成 29 年度発掘調査報告書—



2019

公益財団法人 元興寺文化財研究所

藤原京左京二条四坊
出合・膳夫遺跡

—平成 29 年度発掘調査報告書—

2019

公益財団法人 元興寺文化財研究所



調査区全景（南東から、奥は耳成山）

序

持統八年（694）年に遷都された藤原京は、日本初の条坊道路が整然と整備された宮都となりました。北に耳成山、東に香久山、西に畝傍山といった山々に囲まれた土地に造られた藤原京は、その中心に藤原宮を配置する構造など、それまでの飛鳥の諸宮とも、またその後の平城京とも異なる、新しく独特なものでありました。わずか10年の間の使用でしたが、藤原京の成立は日本史上の画期的な出来事でした。

今回の調査地は、藤原京の北東部に位置します。限られた面積の調査ではありますが、藤原京期の建物を確認しました。柱穴から出土した礎板の分析では、当時の木材利用の具体像に迫ることも出来ました。また、調査地は出合・膳夫遺跡にも含まれており、弥生時代から古墳時代にかけての遺構も確認され、藤原京以前の土地利用の一端が明らかになりました。本書が今後の調査研究の一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査から整理報告書刊行に至るまで、全面的にご協力いただきました関係各位に深くお礼を申し上げます。

平成31年3月31日

公益財団法人 元興寺文化財研究所
理事長 辻村泰善

例言

1. 本書は藤原京跡（左京二条四坊）、出合・膳夫遺跡において、店舗建設に先立ち実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 調査地は奈良県橿原市膳夫町 634-2-1 に所在し、開発面積 4,615.32㎡のうち調査対象面積は 160.24㎡である。
3. 調査は奈良県教育委員会から依頼を受け、株式会社コスモス薬品より委託を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所が行い、平成 29 年 8 月 21 日～同年 9 月 15 日を現地調査、平成 30 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日を整理期間とした。
4. 発掘調査は村田裕介、佐藤聖聖（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当し、武田浩子（公益財団法人元興寺文化財研究所）、緒方侑美（天理大学学生）、中原七菜子（奈良大学学生）が補佐した。
5. 調査地の座標および基準点測量は、公益財団法人元興寺文化財研究所が実施し、株式会社アクセスが分担した。
6. 本書で示す方位は座標北を使用した。座標基準は世界測地系（平面直角座標第Ⅳ系）に基づき、水準は T.P. によるものである。
7. 本書で使用した土色名および遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』（日本色研事業株式会社）に準拠した。
8. 発掘調査における土工等土木部門は有限会社ワークが担当した。
9. 遺構写真撮影は村田、佐藤が、遺物写真撮影は大久保治（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当した。
10. 出土遺物の実測および浄書は仲井光代、武田浩子、芝 幹（公益財団法人元興寺文化財研究所）と株式会社文化財サービスが行った。
11. 実測図中の灰色の塗りは煤の範囲、ドットのトーンは被熱痕の範囲を表現している。
12. 藤原京の条坊呼称に関しては、『奈良県遺跡地図』に準拠した。
13. 本書に使用した土器の分類、編年、年代観については以下の文献を参照した。本文中で触れる分類名、年代表記はこれらに依拠している。

財団法人大阪府文化財センター 2006『古式土師器の年代学』

奈良国立文化財研究所 1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ 奈良国立文化財研究所学報第 31 冊

西 弘海 1986「七世紀の土器の時代区分と形式変化」『土器様式の成立とその背景』真陽社

尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995「瓦器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

奈良市教育委員会 2014『南都出土中近世土器資料集—奈良町高天町遺跡(HJ 第 559 次調査)出土資料—』
14. 発掘調査及び整理報告書作成にかかる費用については、株式会社コスモス薬品が全額負担した。
15. 当該調査において出土した遺物、実測図や写真などの調査記録は橿原市教育委員会において保管している。
16. 本書の執筆は第 4 章を木沢直子（公益財団法人元興寺文化財研究所）、そのほかを村田が執筆した。本書の編集は村田が行い、芝がこれを補佐した。

17. 発掘調査及び報告書作成に際しては、以下の方々からのご助言、ご協力を頂いた。記して感謝申し上げます。

橿原市教育委員会、奈良県教育委員会、川上洋一、北山峰生、岡田雅彦、平岩欣太、松井一晃、杉山真由美

(敬称略、順不同)

目次

第1章 調査に至る経緯と調査体制	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過（調査日誌抄）	2
第2章 周辺における既往の調査と課題	3
第3章 調査の成果	5
第1節 調査区の配置と基本層序・遺構面の認定	5
第2節 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物	6
第1項 検出遺構	6
第2項 出土遺物	9
第3節 古代の遺構と遺物	16
第1項 検出遺構	16
第2項 出土遺物	19
第4節 中世以降の遺構と遺物	19
第1項 検出遺構	19
第2項 出土遺物	19
第5節 表土出土遺物	21
第4章 自然科学分析	22
第5章 総括	26

図版目次

図1 今回の調査区と既往の調査地 (S=1/2,000)	3
図2 周辺の遺跡 (S=1/25,000)	4
図3 全体平面図 (S=1/200)	5
図4 壁面土層断面図 (1) (S=1/40)	6
図5 壁面土層断面図 (2) (S=1/40)	7
図6 SI070 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)	8
図7 SA050 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)	8
図8 NR060 平面図 (S=1/100)	9
図9 SI070 出土遺物実測図 (S=1/3)	9
図10 SA050 出土遺物実測図 (S=1/3)	9
図11 NR060 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	10
図12 NR060 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	12
図13 NR060 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)	13
図14 NR060 出土遺物実測図 (4) (S=1/3・2/3)	15

図 15 SB040 平面図 (S=1/80)	17
図 16 SB040 土層断面図 (S=1/40)	18
図 17 SB040 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	19
図 18 SB040 出土遺物実測図 (2) (S=1/8)	20
図 19 素掘小溝出土遺物実測図 (S=1/3)	21
図 20 表土出土遺物実測図 (S=2/3)	21
図 21 木材組織顕微鏡写真 (1)	24
図 22 木材組織顕微鏡写真 (2)	25
図 23 検出遺構配置略図 (S=1/200)	29

表目次

表 1 樹種同定対象遺物	22
表 2 報告遺物一覧 (1)	30
表 3 報告遺物一覧 (2)	31
表 4 報告遺物一覧 (3)	32
表 5 検出遺構および出土遺物一覧 (1)	33
表 6 検出遺構および出土遺物一覧 (2)	34

写真図版目次

巻頭図版	図版 6
調査区全景 (南東から、奥は耳成山)	SB040 全景 (南から)
図版 1	SB040 完掘状況 (南から)
遺構検出状況 (西から)	図版 7
素掘小溝完掘状況 (西から)	SB040 柱穴 d 土層断面 (北東から)
図版 2	SB040 柱穴 j 礎板出土状況 (北から)
遺構完掘状況 (西から)	図版 8
SI070 完掘状況 (南から)	SI070、SA050、NR060 出土遺物
図版 3	図版 9 ~ 15
SI070 土層断面 (南から)	NR060 出土遺物
SA050 全景 (南から)	図版 16
図版 4	SB040 出土遺物
NR060 全景 (南西から)	図版 17
NR060 東側断面 (西から)	SB040、素掘小溝、表土出土遺物
図版 5	
NR060 南側断面東側 (北から)	
NR060 南側断面西側 (北から)	

第1章 調査に至る経緯と調査体制

第1節 調査に至る経緯

平成29年5月15日付けで株式会社コスモス薬品より店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の届出が提出された。これを受けて平成29年6月12日に奈良県教育委員会は当地が藤原京の範囲であり、また弥生時代の集落跡である出合・膳夫遺跡の中に含まれていることから、橿原市教育委員会へ発掘調査の実施を指示、平成29年6月13日、及び同年7月3日に橿原市教育委員会が試掘調査を実施し、敷地内に設定したトレンチの現代耕作土下0.5mにおいて遺構を確認した。この結果を受けて、調査地北東に予定される調整池部分において遺構への影響が想定されることから、橿原市教育委員会は発掘調査実施に向けた協議を開始した。しかし、工期を勘案した結果、公共機関による発掘調査は困難と判断されたため、公益財団法人元興寺文化財研究所へ発掘調査を依頼することとなった。

奈良県教育委員会より発掘調査の依頼を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所は、平成29年8月10日、藤原京左京二条四坊、出合・膳夫遺跡の発掘調査業務に係る委託契約を株式会社コスモス薬品と締結、平成29年8月15日に発掘調査届出を提出のうえ、平成29年8月21日より現地調査を開始した。

現地調査は平成29年9月15日に終了し、その後すみやかに整理・報告書作成業務に移行した。現地調査から報告書作成に至る間、株式会社コスモス薬品の全面的な支援・協力があつた。また、奈良県教育委員会、橿原市教育委員会からの適切なご指導を賜った結果、調査・整理作業を無事に終了することが出来た。関係各位に感謝する次第である。

第2節 調査体制

発掘調査並びに整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

調査指導：奈良県教育委員会文化財保存課・橿原市教育委員会文化財課

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理事長 辻村泰善
 所長 辻村泰善(兼務)
 副所長 狭川真一
 事務局長 江島和哉
 総合文化財センター長 塚本敏夫
 文化財調査修復研究グループ
 リーダー 金山正子
 主 務 角南聡一郎

主任研究員 佐藤亜聖

研究員 村田裕介（現地調査・整理報告担当）

研究員 坂本 俊

現地作業員：有限会社ワーク

測 量：公益財団法人元興寺文化財研究所・株式会社アクセス

第3節 調査の経過（調査日誌抄）

平成29年

- 8月21日（月） 資機材の搬入。橿原市教育委員会立会いのもと調査区を設定する。重機掘削開始、調査区全域に素掘小溝が分布していることを確認。重機掘削完了。
- 8月22日（火） 遺構検出作業および遺構検出状況の写真撮影。地区杭およびベンチマークの設定を行う。
- 8月23日（水） 遺構掘削を開始する。
- 8月25日（金） 素掘小溝の掘削完了。
- 8月28日（月） 素掘小溝完掘状況の写真撮影。
- 8月29日（火） SB040、SA050の全景写真撮影。
- 8月30日（水） NR060の掘削開始。
- 8月31日（木） NR060に複数の粗砂の堆積がみられる。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が伴う。
- 9月7日（木） 午後から降雨のため、作業中止。
- 9月12日（火） 降雨のため、作業中止。
- 9月13日（水） SB040の完掘全景写真撮影。
- 9月14日（木） SB040の平面図作成。NR060掘削完了。
- 9月15日（金） 遺構掘削完了。調査区全景の写真撮影を行い、現地調査を終了する。

第2章 周辺における既往の調査と課題

調査地は橿原市膳夫町 634-2-1 に位置する。藤原京内の北東部に位置し、調査地は左京二条四坊北西坪に当たり、調査地のすぐ北には一条大路が想定される。条里呼称においては、十市郡路東二十四条三里に当たり、字名は「鎌枝田」である。また、弥生時代の集落遺跡である出合・膳夫遺跡の中に含まれる。

今回の調査地である左京二条四坊内では、これまでも橿原市教育委員会による 1991-8 次調査（橿原市教育委員会 1992）、2003-2 次調査（橿原市教育委員会 2005）などが行われ、藤原京期の建物遺構、道路跡などが確認されている。また、1992 年には奈良県立橿原考古学研究所による調査も行われており（奈良県立橿原考古学研究所 1993）、道路側溝、掘立柱建物、柵などの藤原京期の遺構が確認されている。藤原京期以外の遺構としては、橿原市教育委員会 1991-8 次調査で弥生時代の自然流路や溝、土坑、中世の建物、同 2003-2 次調査で弥生時代の自然流路や縄文時代のピットなどが確認されている。

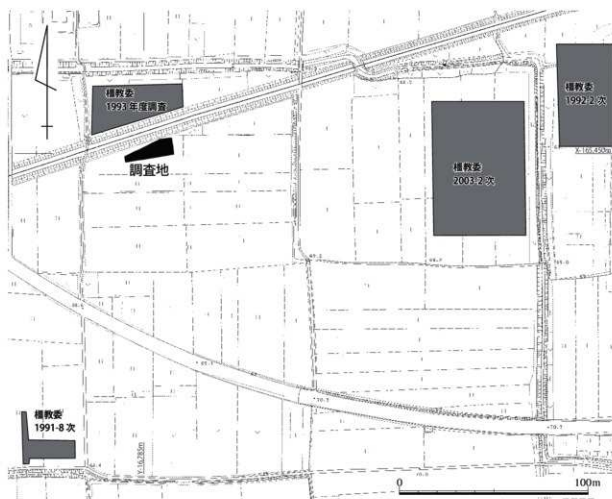


図1 今回の調査区と既往の調査地 (S=1/2,000)

今回の調査区のすぐ北の左京一条四坊においては、橿原市教育委員会により1993年に発掘調査が行われており、藤原京期の柵と弥生時代の自然流路が検出されている。その南に位置する今回の調査区でも、藤原京期の遺構の検出が予測され、また弥生時代の自然流路の延長の検出も想定された。

〈引用・参考文献〉

橿原市教育委員会1992『橿原市埋蔵文化財概報』9

橿原市教育委員会2005『平成15年度橿原市文化財調査年報』

奈良県立橿原考古学研究所1993『奈良県遺跡調査概報』1992年度（第二分冊）

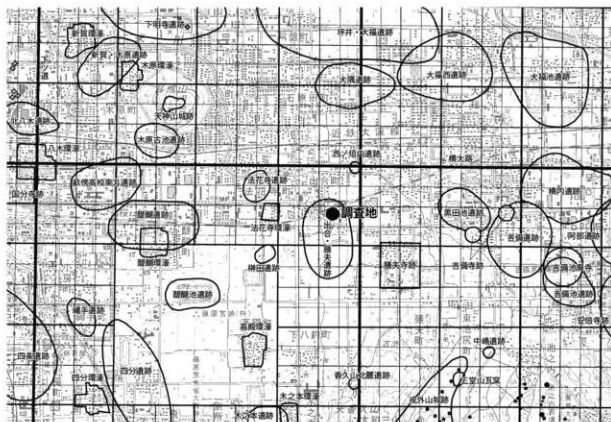


図2 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

第3章 調査の成果

第1節 調査区の配置と基本層序・遺構面の認定

調査前の調査区は水田であり、標高は約67.3mの平坦地であった。調査区の設定については、橿原市教育委員会による試掘調査の結果をもとに、遺構に影響の及ぶ開発対象地の北東部に東西約25m、南北約12mのトレンチを設定した(図3)。

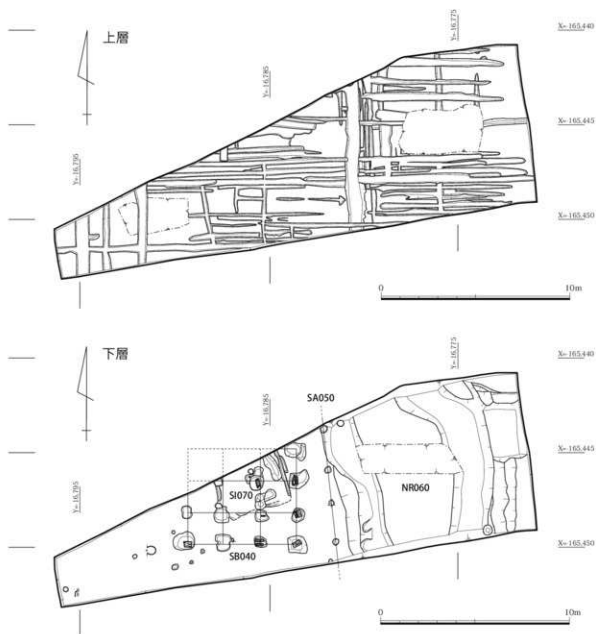
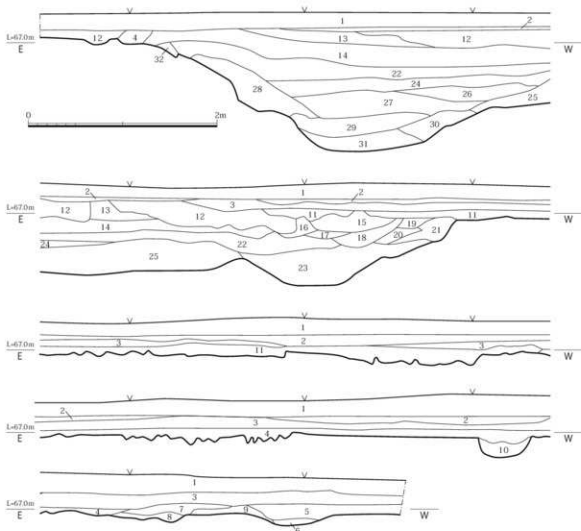


図3 全体平面図 (S=1/200)

南壁



- | | |
|---|---|
| 1. 黄灰 2.5Y4/1 粗砂混細砂 (表土) | 17. 黄灰 2.5Y5/1 細～中砂 (炭化物少量含む) (NR060) |
| 2. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混細砂 (径 0.5cm 以下の地山ブロック含む) | 18. 黄灰 2.5Y4/1 細～粗砂 (ラミナ) (NR060 砂 2) |
| 3. 黄灰 2.5Y5/3 粗砂混細砂 (マンガン少量含む) (中世包含層) | 19. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混細砂 (マンガン含む) (NR060 砂 2) |
| 4. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混細砂 (径 1cm 以下の地山ブロック、マンガン含む) (黒銅漬) | 20. 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂 (ラミナ) (NR060 砂 2) |
| 5. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混シルト～細砂 | 21. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混細砂 (炭化物少量、マンガン含む) (NR060) |
| 6. 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト部中～粗砂 | 22. 黄灰 2.5Y5/1 細砂 (炭化物少量含む) (NR060) |
| 7. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混細砂 (径 0.5cm 以下の地山ブロック少量含む) (黒銅漬) | 23. 黄灰 2.5Y5/1 細砂～細砂 (炭化物少量含む ラミナ) (NR060 砂 3) |
| 8. オリーブ期 2.5Y4/3 粗砂混シルト (径 1～2cm の地山ブロック少量含む) | 24. 黄灰 2.5Y4/1 粗砂混シルト (マンガン少量含む) (NR060) |
| 9. 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト部粗砂 | 25. 黄灰 2.5Y4/1 細～中砂 (NR060) |
| 10. にぶい黄期 10YR 4/3 粗砂～細砂混シルト (炭化物少量含む) | 26. 黄灰 2.5Y4/1 シルト～細砂 (炭化物含む ラミナ) (NR060) |
| 11. 灰黄期 10YR4/2 粗砂混シルト (炭化物少量含む) (黒銅漬) | 27. 黄灰 2.5Y4/1 細砂混粗砂 (炭化物、植物遺体含む ラミナ) (NR060 砂 4) |
| 12. 暗灰 10YR4/1 粗砂混シルト～細砂 (マンガン含む) (黒銅漬) | 28. 灰 5Y5/1 シルト～細砂 (径 1～2cm の地山ブロック含む) (NR060) |
| 13. にぶい黄期 10YR4/3 粗砂混細砂 (マンガン含む) (NR060) | 29. 灰 5Y4/1 粗砂混シルト～細砂 (植物遺体含む) (NR060 砂 4) |
| 14. 暗灰 10YR4/1 粗砂混シルト～細砂 (マンガン含む) (NR060) | 30. 黄灰 2.5Y4/1 シルト～細砂 (植物遺体含む) (NR060 砂 4) |
| 15. 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂混中～粗砂 (ラミナ) (NR060 砂 1) | 31. 黄灰 2.5Y5/1 細砂混中～粗砂 (ラミナ) (NR060 砂 4) |
| 16. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混シルト～細砂 (マンガン含む) (NR060) | 32. 黄灰 2.5Y4/1 粗砂混細砂 (径 1～4cm の地山ブロック、マンガン含む) (NR060) |

図4 壁面土層断面図 (1) (S=1/40)

遺構面は1面で、全ての遺構がこの面で検出された。基本層序は、上層から層厚約20cmの現代の耕作土、層厚約15cmの中近世包含層であり、中近世包含層を除去した明橙褐色シルト上面を遺構面と認定した。遺構面の標高は、西から東へかけて徐々に高くなっており、西側で約66.95m、東側で67.15mを測る(図4・5)。

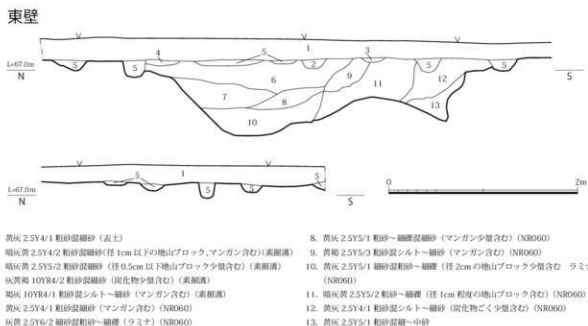


図5 壁面土層断面図(2) (S=1/40)

第2節 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物

第1項 検出遺構

竪穴建物

SI070 (図6、図版2・3)

調査区中央西寄りで検出した竪穴建物で、北側は調査区外へ続く。掘立柱建物 SBO40 の下層に重複しており、遺存状態は悪く、貼床と壁溝の一部が遺存するのみである。平面規模は東西で3.7mで、方形を呈するものと考えられる。主軸方向は北で西へ $19^{\circ}17'$ 振れる。

出土遺物から弥生時代後期に属するものと考えられる。

柵

SA050 (図7、図版3)

調査区中央で検出した。南北方向に伸びるもので、調査区内では4基の柱穴を検出している。柱間距離は約1.6mを測る。柱穴は直径0.3m前後の円形を呈し、検出面からの深さは約0.2mを測る。柱痕跡から直径0.1m前後の柱の存在が推定できる。自然流路 NR060 の西肩部に重複し、主軸方向は北で西に $3^{\circ}50'$ 振れるものである。

出土遺物から古墳時代初頭に属するものと考えられる。

自然流路

NR060 (図8、図版4・5)

調査区東半で検出した。南北方向のもので、調査区北東部で東側からの合流がみられる。幅は南北方向のものが約9m、東側から合流するものが約3.5mを測る。粗い砂層の堆積が大きく4回確認され、

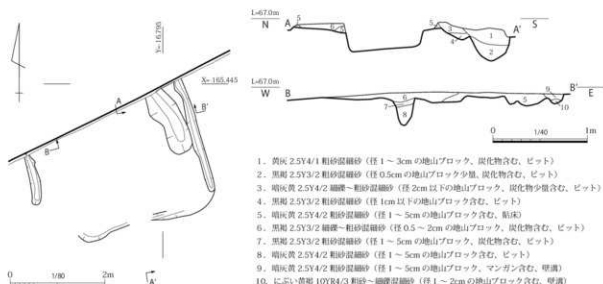


図6 SI070 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)

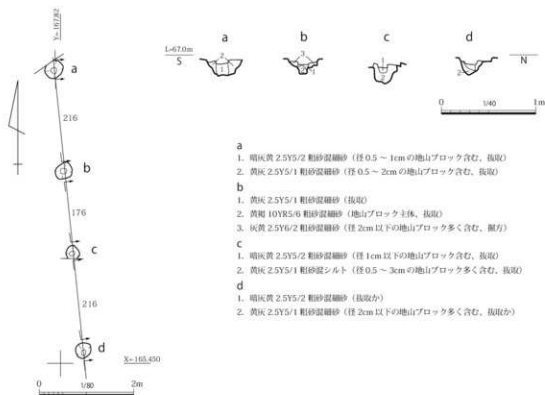


図7 SA050 平面・土層断面図 (平面 S=1/80・断面 S=1/40)

その間にシルト～細砂の堆積がみられる。砂層の堆積は東側に 1 回、西側に 3 回みられることから、機能時には幅 1m 程度の幅で、中心部にはそれほどの流水はなかったものと考えられる。最上層は黒褐色細砂であり、この段階では流水の痕跡はみられない。度重なる洪水などにより流路が埋没した後に、陸地化したものと考えられる。

遺物は弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものが出土しており、弥生時代後期からの流路で、最終埋没が古墳時代前期になると考えられる。

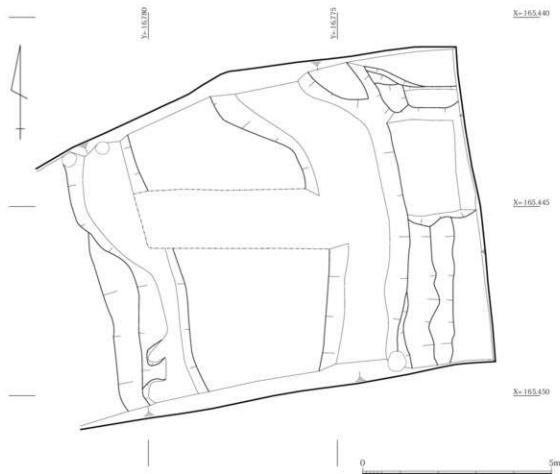


図8 NR060 平面図 (S=1/100)

第2項 出土遺物

竪穴建物

SI070 出土遺物 (図9、図版8)

弥生土器甕(1) 内外面ともにナデ調整を施し、
頸部外面にはコビオサエ痕が残る。



図9 SI070 出土遺物実測図 (S=1/3)

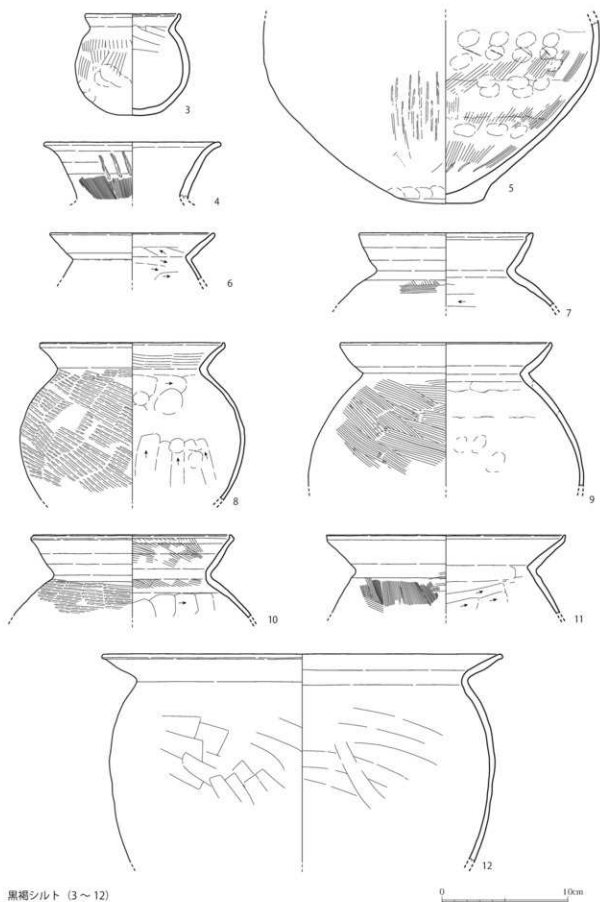
櫛

SA050 出土遺物 (図10、図版8)

土師器甕(2) 体部は外面に右上がりのタタキ調整後縦方向のハケメ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、端部を上方へ僅かに拡張する。胎土には角閃石を含む。口縁部内外面に煤が付着する。



図10 SA050 出土遺物実測図 (S=1/3)



黒褐シルト (3~12)

図 11 NR060 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)

自然流路

NR060 出土遺物 (図 11～14、図版 8～15)

【黒褐色シルト】

土師器壺 (3～5) 3は平底を呈する。体部は外面に縦方向のハケメ調整、内面上半に横方向ないし斜め方向のヘラケズリ調整、内面下半にナデ調整を施し、外面にはユビオサエ痕が残る。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、端部を上方へ拡張する。4は口縁部外面下半に縦方向のハケメ調整、内面上半および内面にヨコナデ調整を施す。外面には3条の平行な線刻が確認できる。5は平底を呈する。体部は外面にナデ調整後、縦方向のヘラミガキ調整、内面に縦方向のハケメ調整後ナデ調整を施す。外面底部付近及び内面にはユビオサエ痕が残る。

土師器甕 (6～12) 6は体部は外面に縦方向のハケメ調整後ナデ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整、口縁部は外面にヨコナデ調整、内面は上半に横方向のハケメ調整、下半に横方向のヘラケズリ調整を施す。7は体部は外面に縦方向のハケメ調整後肩部付近に横方向のハケメ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は内面に肥厚する。8は体部は外面に左上がりのタタキ調整、内面は下半に縦方向のヘラケズリ調整、上半に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内面に横方向のハケメ調整後、内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方へ僅かに拡張する。体部内面にはユビオサエ痕が残る。9は体部は外面に斜め方向のハケメ調整、内面にナデ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方へ僅かに拡張する。体部内面にはユビオサエ痕、粘土接合痕が残る。10は体部は外面に左上がりのタタキ調整、内面は頸部付近に斜め方向のハケメ調整、それ以下は横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内面に斜め方向のハケメ調整後、内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方へ僅かに拡張する。11は体部は外面に縦方向ないし斜め方向のハケメ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方へ僅かに拡張する。12は体部は内外面ともにナデ調整、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。体部外面には黒斑が観察できる。

土師器高杯 (13) 杯部外面に横方向のハケメ調整、内底面に放射方向のヘラミガキ調整を施す。口縁部は調整不明である。底部中心に直径6mm程度の焼成後穿孔がなされる。

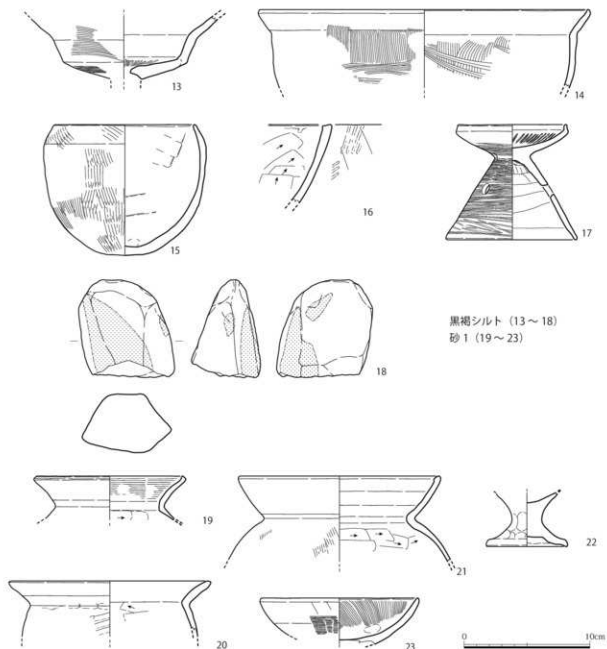
土師器鉢 (14～16) 14は体部は外面にタタキ調整後、縦方向のハケメ調整を施し、下半には横方向のハケメ調整を加える。内面は縦方向のハケメ調整後、斜め方向のハケメ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は僅かに上方に拡張する。体部外面には黒斑が観察できる。15は弱い平底を呈する。外面に縦方向のハケメ調整、内面にナデ調整を施し、口縁端部は尖り気味である。内底面にはユビオサエ痕が残る。16は外面に右上がりのタタキ調整後ナデ調整、内面に横方向ないし斜め方向のヘラケズリ調整を施す。口縁端部はヨコナデ調整を施し、上方に面を持つ。

土師器器台 (17) 脚部は外面に横方向のヘラミガキ調整、内面に横方向のナデ調整を施す。受部は外面に横方向のヘラミガキ調整、内面にナデ調整後、放射方向の粗いヘラミガキ調整を施す。脚部の透孔は3方向である。受部内底面には敲打痕状の使用痕がみられる。

石裂支脚 (18) 全体に被熱痕がみられる。花崗閃緑岩製である。

【砂 1】

土師器甕 (19～21) 19は体部は外面にナデ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内面に横方向のハケメ調整後、内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方へ僅かに拡張する。20は体部は外面に右上がりのタタキ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面と



黒褐シルト (13～18)
砂 1 (19～23)

図 12 NR060 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)

もにヨコナデ調整を施し、口縁端部は丸くおさめる。胎土には角閃石を含む。21 は体部は外面に縦方向のハケメ調整後、ナデ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は内面に肥厚する。

土師器台付鉢(22) 台付鉢の台部である。内外面ともにナデ調整を施し、外面にはユビオサエ痕が残る。土師器器台(23) 器台の受部である。外面に横方向のハケメ調整、内面に斜め方向のハケメ調整を施す。口縁端部は尖り気味で、外面に面を持つ。

【砂 2】

土師器壺 (24) 底部は丸底を呈する。体部は外面にナデ調整、内面に横方向ないし斜め方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。外底面付近にはユビオサエ痕が残る。体部下半に直径 5mm 程度の焼成後穿孔がなされる。

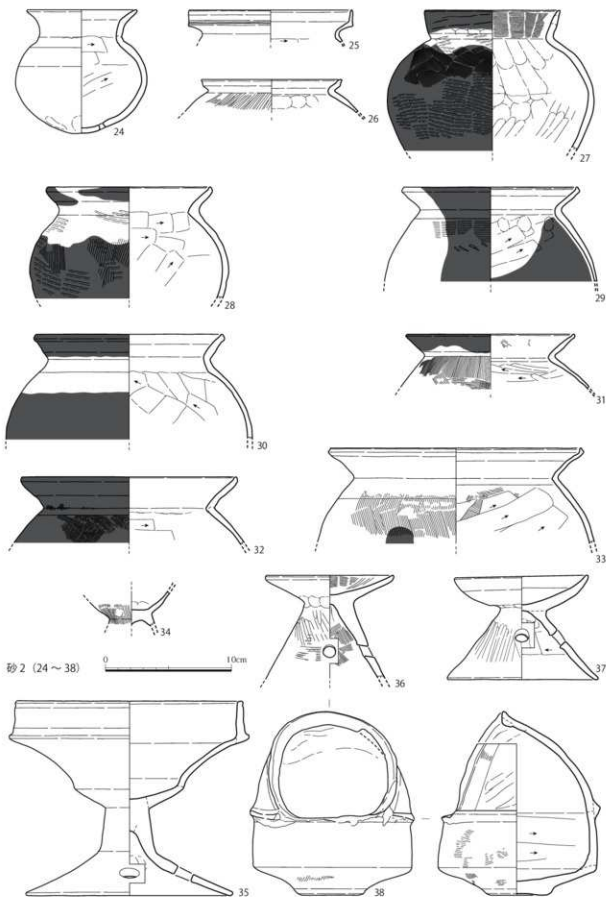


図13 NR060 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)

土師器甕 (25～34) 25は体部は外面にナデ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方に拡張し、外面下半に2条の凹線が廻る。26はいわゆるS字甕であるが、口縁部の外方への突出は弱く、口縁部外面への刺突文もみられない。体部は外面に斜め方向のハケメ調整、内面にナデ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。体部内面頸部付近にユビオサエ痕が残る。27は体部は外面に左上がりのタタキ調整後、上半に斜め方向のハケメ調整、内面にナデ調整を施す。口縁部は外面にナデ調整、内面に横方向のハケメ調整を施す。口縁部外面には粘土接合痕が残る。外面に煤が付着する。28は体部は外面に左上がりのタタキ調整後、肩部付近に縦方向のハケメ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方に僅かに拡張する。外面に煤が付着する。29は体部は外面に横方向のハケメ調整、内面に斜め方向のヘラケズリ調整を施す。肩部付近外面に刺突文を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方へ僅かに拡張する。体部内面頸部付近にユビオサエ痕が残る。内外面に煤が付着する。30は体部は外面にナデ調整、内面に横方向ないし斜め方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は外上方に面を持つ。外面に煤が付着する。31は体部は外面に縦方向のハケメ調整後、肩部付近に横方向のハケメ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は内面に僅かに肥厚する。口縁端部外面に煤が付着する。32は体部は外面に右上がりのタタキ調整後、斜め方向のハケメ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方へ僅かに拡張する。外面に煤が付着する。33は体部は外面に縦方向のハケメ調整後、頸部付近に横方向のハケメ調整、内面に斜め方向のハケメ調整後、斜め方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方へ僅かに拡張する。34は台付甕の台部である。外面に縦方向のハケメ調整、内面にナデ調整を施す。体部との接合部付近は内外面ともにユビオサエ痕が残る。色調は灰白色を呈する。

土師器高杯 (35) 全体に表面劣化のため、調整が不明な部分もあるが、内外面ともにナデ調整によるものである。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整する。脚部の透孔は4方向である。高杯の上部に壺ないし甕の口縁部が載る結合土器である可能性が考えられる。

土師器器台 (36・37) 36は脚部は外面にタタキ調整後、縦方向のヘラミガキ調整、内面に縦方向のハケメ調整を施す。受部は外面にナデ調整、内面に横方向のハケメ調整後、放射方向のヘラミガキ調整を施す。脚部の透孔は4方向である。37は脚部は外面にナデ調整後、縦方向のヘラミガキ調整、内面にナデ調整後、中位に横方向のヘラケズリ調整を施す。受部は外面にナデ調整後、脚部との接合部付近に横方向のヘラケズリ調整、内面にナデ調整を施す。口縁端部付近にはヨコナデ調整をする。脚部の透孔は4方向である。

手焙形土器 (38) 底部は平底を呈する。鉢部は外面に横方向のハケメ調整後、ナデ調整、内面は底部にナデ調整、体部に横方向のヘラケズリ調整を施す。覆部は外面に縦方向のハケメ調整後、ナデ調整、内面にナデ調整を施し、覆部端部はヨコナデ調整し、上方に僅かに拡張する。鉢部と覆部の接合はナデ調整により、外面には断面三角形の突帯が廻る。覆部内面には粘土接合痕が残る。

【砂3】

土師器甕 (39～46) 39は体部は外面に右上がりのタタキ調整後、縦方向のハケメ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内面に横方向のハケメ調整、外面にヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方へ僅かに拡張する。外面に煤が付着する。胎土には角閃石を含む。40は体部は右上がりのタ

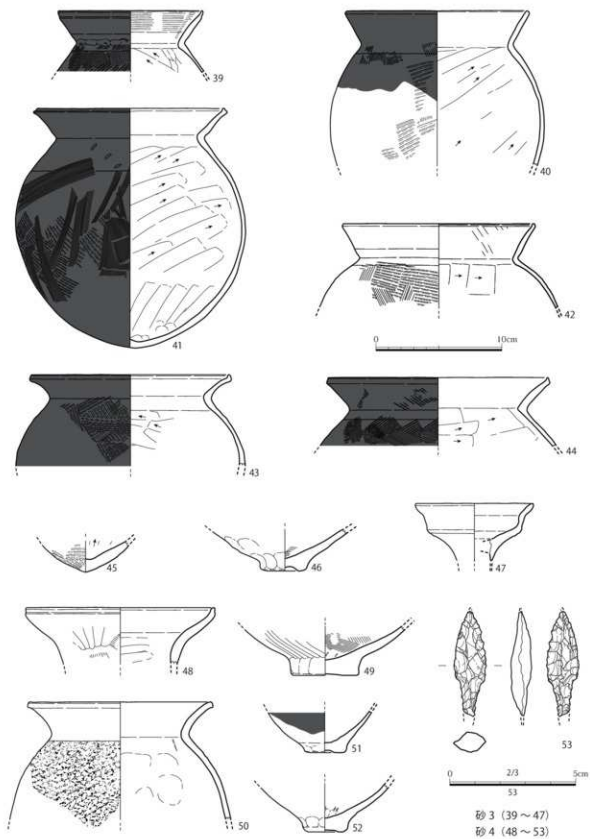


図 14 NR060 出土遺物実測図 (4) (S=1/3・2/3)

タキ調整後、頸部付近に縦方向のハケメ調整、内面に斜め方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。外面に煤が付着する。体部外面には黒斑が確認できる。41は丸底を呈する。体部は外面に左上がりのタタキ調整後、縦方向ないし斜め方向のハケメ調整、内面に縦方向ないし斜め方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方へ僅かに拡張する。内底面にはユビオサエ痕が残る。外面に煤が付着する。42は体部は外面に左上がりのタタキ調整後、縦方向のハケメ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方へ僅かに拡張する。外面に煤が付着する。43は体部は外面に矢羽状タタキ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方へ僅かに拡張する。外面に煤が付着する。44は体部は外面に右上がりのタタキ調整後、斜め方向のハケメ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部は外面に左上がりのタタキ調整後、内外面ともにヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方へ僅かに拡張する。外面に煤が付着する。45は尖底を呈する。外面にタタキ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整を施す。内底面にはユビオサエ痕が残る。46は平底を呈し、外底面は凹む。外面にナデ調整、内面に横方向のハケメ調整を施す。外面にはユビオサエ痕が残る。

土師器高杯(47) 内外面ともにナデ調整を施す。杯部底部は粘土塊を充填することで形成するものと考えられる。

【砂4】

土師器壺(48・49) 48は頸部は外面にハケメ調整後、ナデ調整、内面にナデ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整を施し、口縁端部は上方へ拡張する。口縁端部外面には1条の凹線が廻る。胎土には角閃石を含む。外面に煤が付着する。49は平底を呈する。外面にナデ調整、内面にハケメ調整を施し、外面底部付近にはユビオサエ痕が残る。胎土には角閃石を含む。

土師器甕(50～52) 50は体部は外面に綾杉状タタキ調整、内面にナデ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。体部内面にはユビオサエ痕が残る。外面に煤が付着する。51・52は平底を呈し、外底面中心が凹む。内外面ともにナデ調整を施し、外面底部付近にはユビオサエ痕が残る。

石籤(53) サヌカイト製である。先端及び基部を欠損する。重さ3.6gを測る。

第3節 古代の遺構と遺物

第1項 検出遺構

掘立柱建物

SB040(図15・16、図版6・7)

調査区中央西寄り検出した。12基の柱穴を検出し、そのうち3基の柱穴(柱穴a・d・h)は著しく深い。柱穴aと柱穴dは建物隅の柱穴であり、柱穴hについても同様に隅の柱穴となる可能性があるため、これらの柱穴を建物の隅の柱穴として考えると3間×3間の総柱建物であると推定できる。柱間距離は東西方向が約2.0m前後、南北方向が約1.8m前後を測り、東西方向の柱間が南北方向のそれよりも長くなる。柱穴は長軸0.7～1.1m、短軸0.5～0.9mの平面隅丸方形を呈し、検出面からの深さは、隅柱で0.7m、それ以外で0.3mを測る。柱痕跡から径0.3m前後の柱の存在が推定できる。主軸方向

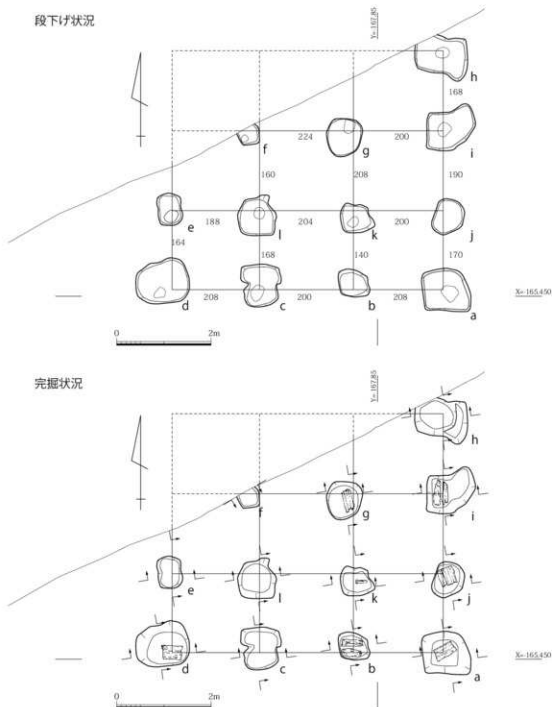
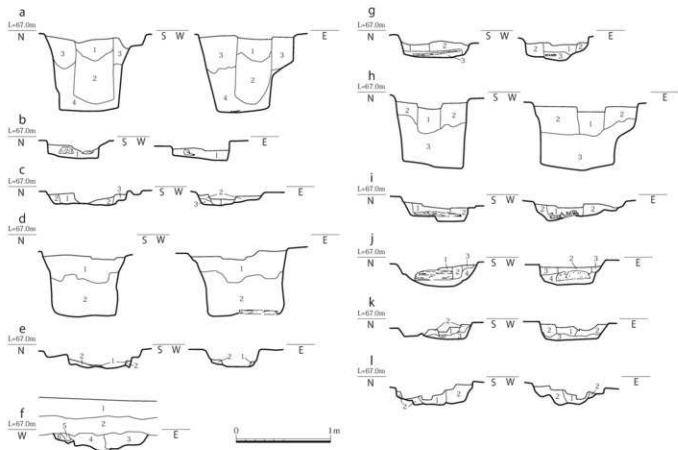


図 15 SB040 平面図 (S=1/80)

は北で西に $1^{\circ} 33'$ 振れるものである。

柱穴のうち7基（柱穴 a・b・d・g・i・j・k）からは礎板が出土した。出土した柱穴の位置には規則性を見出しがたい。遺存状態のよいものから推定すると、外側を調整した丸太材を楔などを用いて縦に割いたものを礎板として用いたようである。割いた面には、ほとんど調整がみられないことから、柱材などとしてあらかじめ外面を調整された状態で用意されていた部材の一部を築造時に転用して用いたものと考えられる。礎板上面の標高は、隅柱で約 66.2m、それ以外で 66.8m である。

遺物の出土は少ないが、土師器・須恵器が出土している。藤原京期の遺構と考えられる。



- a**
1. 灰黄期 10YR4/2 粗砂混細砂 (径 1cm 程度の地山ブロック, マンガン含む 掘取)
 2. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混シルト (径 1~2cm の地山ブロック, 下方グライ化 掘取)
 3. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混細砂 (径 0.5~2cm の地山ブロック, マンガン含む 掘方)
 4. 暗灰黄 10YR4/2 粗砂混細砂 (径 1~2cm の地山ブロック含む, 下方グライ化 掘方)

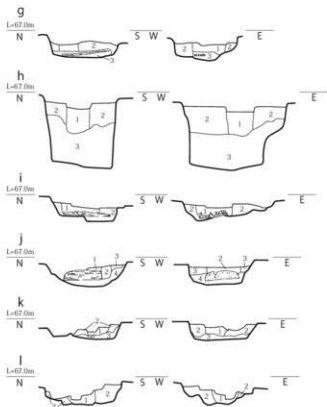
- b**
1. 期 10YR4/4 粗砂混細砂 (地山ブロック主体, 一部グライ化)

- c**
1. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混細砂 (径 0.5~1cm の地山ブロック含む 掘取)
 2. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混細砂 (径 0.5cm 以下の地山ブロック, 炭化物少量含む 掘方)
 3. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混細砂 (径 0.5~2cm の地山ブロック少量含む 掘方)

- d**
1. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混細砂 (径 0.5cm 以下の地山ブロック, マンガン少量含む 掘方)
 2. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混細砂 (径 0.5~2cm の地山ブロック, 炭化物少量含む, 下方グライ化 掘方)

- e**
1. 黄灰 2.5Y4/1 粗砂混細砂 (径 0.5cm 以下の地山ブロック含む 掘取)
 2. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混細砂 (径 0.5~2cm の地山ブロック含む 掘方)

- f**
1. 黄灰 2.5Y4/1 粗砂混細砂 (鉄分沈着 粘土)
 2. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混細砂 (径 0.5cm 以下の地山ブロック少量含む 中近部包合層)
 3. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混細砂 (径 1~2cm の地山ブロック含む 別遺構)
 4. 黄灰 2.5Y4/1 粗砂混細砂 (径 0.5cm 以下の地山ブロック, マンガン含む 掘方)
 5. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混細砂 (径 1cm 以下の地山ブロック含む 下層遺構)
 6. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混細砂 (径 0.5cm 以下の地山ブロック, 炭化物少量含む 下層遺構)



- g**
1. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混細砂 (径 1cm 以下の地山ブロック, マンガン少量含む 掘取)
 2. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混細砂 (径 1~2cm の地山ブロック少量, マンガン含む 掘方)
 3. 灰 7.5Y5/1 シルト (壁板の置き残り土)

- h**
1. 灰黄期 10YR4/2 粗砂混シルト (径 1cm 以下の地山ブロック, マンガン含む 掘取)
 2. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混シルト (径 1cm 程度の地山ブロック, マンガン含む 掘方)
 3. 灰 5Y5/1 粗砂混シルト (径 1cm 程度の地山ブロック, マンガン少量含む 掘方)

- i**
1. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混細砂 (径 1~3cm の地山ブロック含む 掘取)
 2. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混シルト (径 1~4cm の地山ブロック, マンガン含む 掘方)

- j**
1. 黄灰 2.5Y6/1 粗砂混細砂 (掘取)
 2. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混シルト (掘方)
 3. 期 10YR4/4 粗砂混細砂 (径 1cm 以下の地山ブロックを含む 掘方)
 4. 期 10YR4/6 粗砂混シルト (地山ブロック主体 掘方)

- k**
1. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混細砂 (径 0.5~1cm の地山ブロック, マンガン少量含む 掘取)
 2. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混細砂 (径 0.5~2cm の地山ブロック含む, 一部グライ化 掘方)
 3. 期 10YR4/4 粗砂混細砂 (地山ブロック主体, 一部グライ化 掘方)

図 16 SB040 土層断面図 (S=1/40)

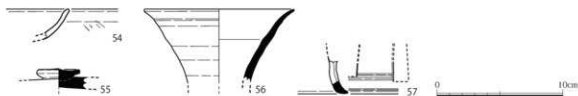


図17 SB040 出土遺物実測図(1) (S=1/3)

第2項 出土遺物

掘立柱建物

SB040 出土遺物 (図17・18、図版16・17)

土師器椀 (54) 椀Aである。体部外面にヘラケズリ調整、口縁部及び体部内面にヨコナデ調整を施す。
須恵器蓋 (55) 杯B蓋である。内外面ともに回転ナデ調整を施し、天井部外面にはボタン状のつまみを貼り付ける。

須恵器壺 (56) 内外面ともに回転ナデ調整を施す。内外面には降灰がみられる。

須恵器碗 (57) 内外面ともに回転ナデ調整を施す。脚部外面に2条と1条の沈線が廻る。透孔は方形を呈する。

礎板 (58～61) 外面を調整した丸太材を楔などで縦方向に分割したものと考えられる。分割面には調整などの手が加えられている部分は少ない。樹種は58がコウヤマキ、59～61がヒノキである(第4章参照)。

第4節 中世以降の遺構と遺物

第1項 検出遺構

素掘小溝 (図版1)

調査区全域に展開する小溝群である。幅0.15～0.7m、検出面からの深さ0.1～0.2mを測る。東西・南北双方向に展開するが、東西方向のものが卓越する。東西方向のもの主軸方向は東で北へ2°32′振れる。

第2項 出土遺物

素掘小溝出土遺物 (図19、図版17)

土師器高杯 (62) 外面に横方向のヘラミガキ調整、内面に縦方向のヘラミガキ調整を施す。杯底部は粘土板を充填することで形成するものと考えられる。

土師器皿 (63・64) 63・64は底部外面にナデ調整、口縁部外面及び内面にヨコナデ調整を施す。底部外面にはユビオサエ痕が残る。

瓦器椀 (65) 口縁部に沈線が廻り、内外面に横方向の粗いヘラミガキ調整を施す。体部下半にはユビオサエ痕が残る。

輸入磁器白磁皿 (66) 口縁端部が端反る。産地は不明である。

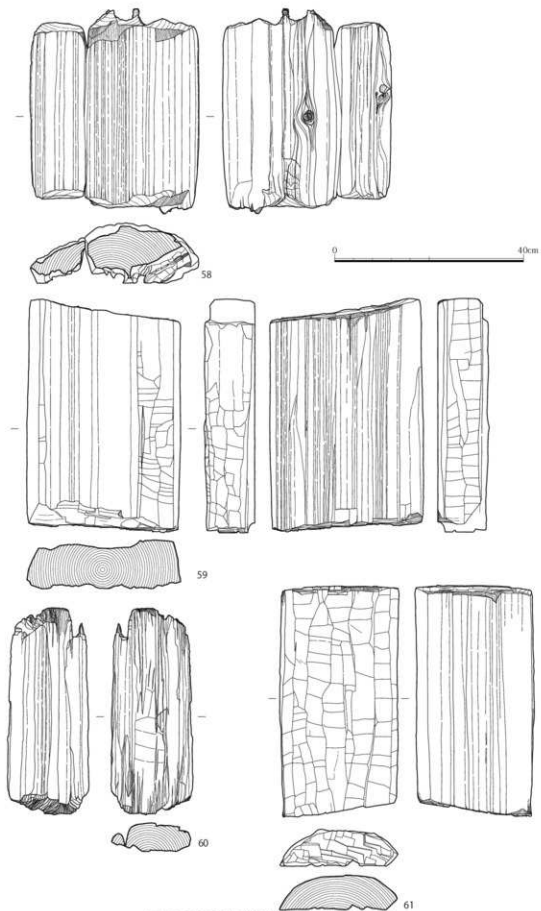


图 18 SB040 出土遺物実測図 (2) (S=1/8)

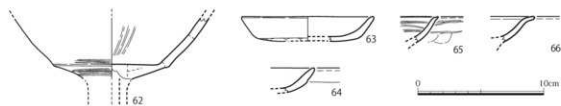


図19 素掘小溝出土遺物実測図 (S=1/3)

第5節 表土出土遺物

表土出土遺物 (図20、図版17)

石鏃(67) サマカイト製である。刃部の一部を欠損するが完形である。重さ3.9gを測る。

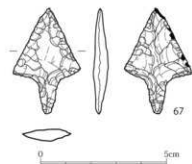


図20 表土出土遺物実測図 (S=2/3)

第4章 自然科学分析

1. 樹種同定対象資料

樹種同定を行なった遺物は、表1に示す通り礎板合計5点である。

表1 樹種同定対象遺物

資料番号	遺物名	報告番号
SB040j (S-051) ①	礎板	58
SB040j (S-051) ②	礎板	
SB040a (S-052)	礎板	61
SB040g (S-053)	礎板	60
SB040d (S-061)	礎板	59

2. 同定方法

樹種同定に必要な木口面（横断面）、板目面（接線断面）、柃目面（放射断面）の3断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール等の有機溶剤に順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、生物顕微鏡で観察した。

3. 使用機器

試料の観察には生物顕微鏡 Olympus BX-53 を、木材組織の顕微鏡写真撮影には顕微鏡デジタルカメラ Olympus DP-71 を使用した。

4. 同定結果

試料の木材組織は顕微鏡写真の通りである。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑本編』(II)に従った。同定は木沢直子(公財)元興寺文化財研究所)が行った。

SB040 柱穴 j (S-051) ①

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.

(コウヤマキ科 Sciadopityaceae)

仮道管と放射柔細胞のみからなる針葉樹材。樹脂細胞、垂直樹脂道、水平樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。分野壁孔は窓状で、1分野に1~2個見られる。放射組織は2~8細胞高である。

植生分布：本州(福島県以南)、四国、九州。

樹形：一科一属一種で日本特産の常緑針葉高木。樹高40m、胸高直径1mに達する。

用途：建築材、桶類、土木、船、棺、井戸枠等。

出土事例：木棺、桶、形代、槽等。

SB040 柱穴 j (S-051) ②

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. (コウヤマキ科 *Sciadopityaceae*)

仮道管と放射柔細胞のみからなる針葉樹材。樹脂細胞、垂直樹脂道、水平樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。分野壁孔は窓状で、1分野に1～2個見られる。放射組織は2～8細胞高である。

SB040 柱穴 a (S-052)

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endl. (ヒノキ科 *Cupressaceae*)

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に接線状に点在する。放射組織は単列で2～12細胞高である。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に2個見られる。

植生分布：本州（福島県以南の主として太平洋側）、四国、九州（屋久島まで）。

樹形：常緑高木で直幹性。樹高30m、胸高直径1mに達する。

用途：建築、彫刻、家具、器具、船、漆器等。

出土事例：建築材、木簡、祭祀具（斎串、形代）、刀剣鞘、容器（折敷、曲物、底板）。

SB040 柱穴 g (S-053)

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endl. (ヒノキ科 *Cupressaceae*)

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に接線状に点在する。放射組織は単列で2～5細胞高である。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に2～3個見られる。

SB040 柱穴 d (S-061)

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endl. (ヒノキ科 *Cupressaceae*)

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅は比較的広い。樹脂細胞は早材～晩材への移行部に接線状に点在する。放射組織は単列で2～12細胞高である。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に2個が多く、時に3個見られる。

5. 考察

礎板に用いられる樹種の傾向は、地域や時代によって異なる。奈良県内では、藤原宮、京城¹⁾および平城宮²⁾、京³⁾域から出土した礎板について樹種同定が行われ、ヒノキとコウヤマキが確認されている。

コウヤマキは、古墳時代に棺材として多用されたことから分かるように、耐湿性が強く、強靱な特性を有する。奈良時代にはヒノキに次いで建築部材に用いられる樹種でもあり、藤原京左京六条三坊の調査では藤原京期の掘立柱建物からコウヤマキの柱根と礎板が出土している⁴⁾。今回藤原京左京二条四坊から出土した礎板にコウヤマキが含まれていたことは、こうした周辺遺跡に見られる用材選択と合致する結果である。

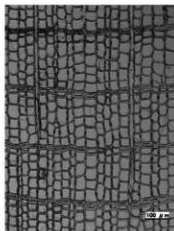
【参考文献】

北村四郎・村田源「原色日本植物図鑑・木本編」Ⅱ、1979年、保育社
 島地謙・伊東隆夫「図説木材図鑑」1982年、地球社
 伊東隆夫・山田昌久編「木の考古学」2012年、南海社

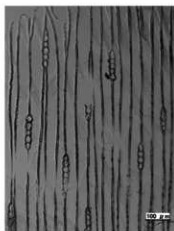
【引用文献】

- 1) 奈良県教育委員会「藤原宮」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊、1969年
- 2) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告X1」第1次大輪廻地域の調査、奈良国立文化財研究所学報第40冊、1982年
- 3) 奈良国立文化財研究所「平城宮左京三条二坊六坪発掘調査報告書」奈良国立文化財研究所学報第44冊、1986年
- 4) 奈良文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告V」藤原宮左京六条三坊の調査、奈良文化財研究所学報第94冊、2017年

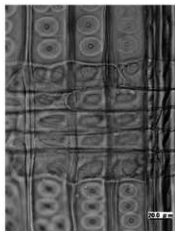
SB040 柱穴 j (S-051) ①



木口面



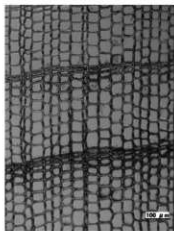
板目面



柱目面

コウヤマキ

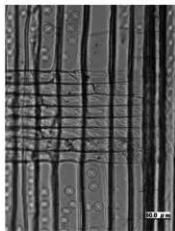
SB040 柱穴 j (S-051) ②



木口面



板目面

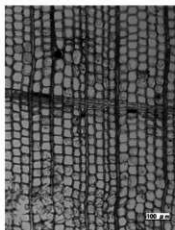


柱目面

コウヤマキ

図 21 木材組織顕微鏡写真 (1)

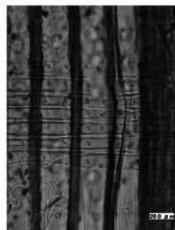
SB040 柱穴 a (S-052)



木口面



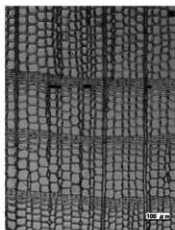
板目面



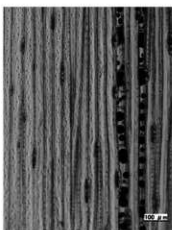
柁目面

ヒノキ

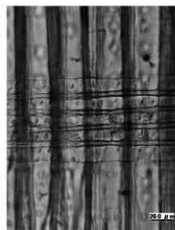
SB040 柱穴 g (S-053)



木口面



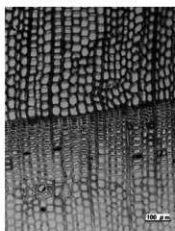
板目面



柁目面

ヒノキ

SB040 柱穴 d (S-061)



木口面



板目面



柁目面

ヒノキ

図 22 木材組織顕微鏡写真 (2)

第5章 総括

今回の調査では、藤原京期については総柱の掘立柱建物1棟を確認した。主軸方向は概ね正方位を向くものである。周辺には同時期の遺構はみられない。本調査区は左京二条四坊の北西部近くに当たるが、藤原京期の遺構は掘立柱建物SB040のみであり、土地利用としては非常に散在的である。また、建物の北側には一条大路が想定されるが、それとの距離が近接している点は、一条大路が機能していた時期などと検討が必要である。SB040の柱穴からは礎板が出土している。樹種鑑定からヒノキとコウヤマキであることが明らかとされ、当時の木材利用について明らかにすることができた。また、礎板にみられる調整からは、柱として用意されたものが転用されている可能性が指摘でき、建物建築時の施工の一面を示唆するものである。

藤原京期以前の様相については弥生時代もしくは古墳時代のものと考えられる竪穴建物、柵と自然流路を検出している。竪穴建物SI070は遺存状態が悪く、詳細は不明であるが、その東にある柵SA050と同様に北でやや西に触れる方向の主軸を持つ点が注目され、同時期に機能していた可能性があるが、自然流路NR060との関係については明らかではない。柵が自然流路の西岸と一部が重複関係にあり、竪穴建物が西岸から約2.5mほどの距離であることから考えれば、同時併存については考え難い。

自然流路については出土遺物から弥生時代後期から古墳時代前期まで機能していたと考えられる。西側の肩部には庄内併行期の柵SA050が設けられていることから、この段階では一部に埋没が進んでいた状況が推察される。埋土に古墳時代前期までのものしか遺物が含まれていないことから、藤原京期には完全に陸地化していたものと考えられるが、北側での調査では、自然流路の埋没土の上方に整地土の存在が指摘されており、これについては今後の課題となる。

関連資料

- 図 23 検出遺構配置略図
表 2～4 報告遺物一覧 (1)～(3)
表 5・6 検出遺構および出土遺物一覧 (1)・(2)

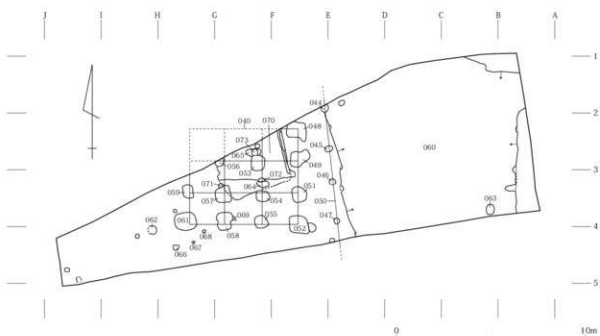
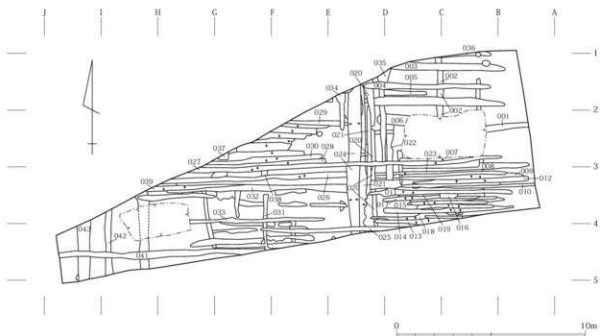


図 23 検出遺構配置略図 (S=1/200)

表2 報告遺物一覧(1)

報告番号	押戻	写真 図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径・最高・底径 (cm) 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
1	図9	図版8	SBO70 部方	赤生土器 甕	・ - (3.4) - - 口縁部片	密 ～2mm 石英・長石・チャート・雲母	黒 紅・黒・橙 7.5YR6/4	
2	図10	図版8	SAO50a	土師器 甕	・ - (3.2) - - 口縁部片	中卒粒 ～4mm 石英・長石・角閃石	黒 紅・黒・黄橙 10YR7/2	
3	図11	図版8	NRO60 黒期シルト	土師器 甕	7.6 - 8.1 - - 95%	密 ～2mm 石英・長石・チャート・クサリ織・ 雲母	黒 紅・黒・黄橙 10YR6/3	
4	図11	図版8	NRO60 黒期シルト	土師器 甕	(14.0) - (4.5) - - 口縁部片	密 ～3mm 石英・長石・チャート・雲母	黒 紅・黒・橙 7.5YR6/4	
5	図11	図版8	NRO60 黒期シルト	土師器 甕	・ - (14.6) - - 40%	密 ～3mm 石英・長石・チャート	黒 灰黄緑 10YR6/2	
6	図11		NRO60 黒期シルト	土師器 甕	(13.1) - (3.8) - - 口縁部片	密 ～8mm 石英・長石・チャート	黒 紅・黒・黄橙 10YR7/4	
7	図11	図版8	NRO60 黒期シルト	土師器 甕	(13.8) - (5.9) - - 10%	密 ～5mm 石英・長石・チャート	黒 紅・黒・橙 7.5YR6/4	
8	図11	図版9	NRO60 黒期シルト	土師器 甕	(14.6) - (12.5) - - 40%	密 ～3mm 石英・長石・チャート・クサリ織	黒 紅・黒・黄橙 10YR7/3	
9	図11	図版9	NRO60 黒期シルト	土師器 甕	(16.8) - (11.4) - - 30%	密 ～6mm 石英・長石・チャート・雲母	黒 紅・黒・橙 7.5YR7/4	
10	図11	図版9	NRO60 黒期シルト	土師器 甕	(16.2) - (6.6) - - 10%	密 ～2mm 石英・長石・チャート・クサリ織・ 雲母	黒 紅・黒・橙 7.5YR6/6	
11	図11	図版9	NRO60 黒期シルト	土師器 甕	(19.0) - (6.3) - - 10%	密 ～2mm 石英・長石・チャート・雲母	黒 紅・黒・黄橙 10YR7/3	
12	図11	図版9	NRO60 黒期シルト	土師器 甕	(31.8) - (16.5) - - 20%	密 ～8mm 石英・長石・チャート	黒 紅・黒・橙 7.5YR7/4	
13	図12	図版10	NRO60 黒期シルト	土師器 高杯	(14.9) - (5.0) - - 30%	密 ～2mm 石英・長石・チャート・雲母	黒 灰黄緑 10YR4/2	
14	図12	図版10	NRO60 黒期シルト	土師器 鉢	(26.2) - (6.2) - - 口縁部片	密 ～2mm 石英・長石・チャート・雲母	黒 地灰 10YR4/1	
15	図12	図版10	NRO60 黒期シルト	土師器 鉢	(11.2) - 10.4 - - 50%	密 ～4mm 石英・長石・チャート・クサリ織	黒 紅・黒・黄橙 10YR6/4	
16	図12		NRO60 黒期シルト	土師器 鉢	・ - (6.3) - - 口縁部片	密 ～3mm 石英・長石・チャート	黒 紅・黒・橙 7.5YR6/4	
17	図12	図版10	NRO60 黒期シルト	土師器 蓋付	(8.1) - 9.1 - 10.4 70%	中卒粒 ～2mm 石英・長石・雲母	黒 橙 7.5YR7/6	
18	図12	図版10	NRO60 黒期シルト	土師器 支脚	7.8 - 7.7 - 5.5 - 357.5g	花崗閃緑岩		
19	図12		NRO60 砂1	土師器 甕	(12.1) - (3.5) - - 口縁部片	密 ～2mm 石英・長石・チャート・雲母	黒 紅・黒・黄橙 10YR7/4	
20	図12	図版10	NRO60 砂1	土師器 甕	(16.0) - (4.5) - - 口縁部片	密 ～7mm 石英・長石・チャート・角閃石・ 雲母	黒 紅・黒・黄緑 10YR5/3	
21	図12	図版11	NRO60 砂1	土師器 甕	(16.2) - (6.8) - - 口縁部片	密 ～5mm 石英・長石・チャート・雲母・ 角閃石	黒 橙 7.5YR7/6	
22	図12	図版11	NRO60 砂1	土師器 行付鉢	・ - (4.3) - (6.2) 25%	密 ～3mm 石英・長石・チャート・雲母	黒 地灰 10YR4/1	
23	図12		NRO60 砂1	土師器 蓋付	(12.6) - (3.6) - - 35%	密 ～4mm 石英・長石・チャート・雲母	黒 紅・黒・黄橙 10YR6/4	
24	図13	図版11	NRO60 砂2	土師器 甕	8.7 - (9.9) - - 90%	密 ～3mm 石英・長石・チャート・雲母	黒 橙 7.5YR6/6	
25	図13	図版11	NRO60 砂2	土師器 甕	(13.0) - (2.6) - - 10%	密 ～4mm 石英・長石・チャート・クサリ織	黒 紅・赤黒 5YR5/4	
26	図13	図版11	NRO60 砂2	土師器 甕	(16.1) - (2.7) - - 口縁部片	密 ～2mm 石英・長石・チャート・クサリ織	黒 紅・黒・橙 7.5YR6/4	
27	図13	図版11	NRO60 砂2	土師器 甕	10.8 - (11.2) - - 30%	密 ～4mm 石英・長石・チャート・クサリ織	黒 橙 7.5YR6/6	
28	図13	図版12	NRO60 砂2	土師器 甕	(13.2) - (8.9) - - 20%	密 ～2mm 長石・チャート・クサリ織	黒 橙 7.5YR7/6	
29	図13	図版12	NRO60 砂2	土師器 甕	(14.1) - (7.5) - - 15%	密 ～3mm 石英・長石・チャート・クサリ織	黒 灰黄緑 10YR6/2	
30	図13	図版12	NRO60 砂2	土師器 甕	(15.1) - (8.3) - - 15%	密 ～6mm 石英・長石・チャート	黒 紅・黒・黄橙 10YR7/4	
31	図13	図版13	NRO60 砂2	土師器 甕	(13.4) - (4.4) - - 15%	密 ～2mm 石英・長石・チャート・雲母	黒 紅・黒・橙 7.5YR6/4	

表3 報告遺物一覧(2)

報告番号	探区	写真図番	出土遺物 層位	種別 器種	口径-器高-底径 (cm) 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
32	Ⅷ13	Ⅷ版12	NR00 砂2	土師器 甕	(17.2) - (5.4) - *	密 ～5mm 石英・長石・チャート	黒 にぶい黄緑 10YR5/3	
33	Ⅷ13	Ⅷ版13	NR00 砂2	土師器 甕	(20.4) - (7.6) - *	密 ～3mm 石英・長石・チャート・雲母	黒 にぶい黒 7.5YR6/3	
34	Ⅷ13	Ⅷ版13	NR00 砂2	土師器 甕	* - (2.8) - *	密 ～2mm 石英・長石・チャート・雲母	黒 灰白 10YR8/2	
35	Ⅷ13	Ⅷ版13	NR00 砂2	土師器 高杯	(18.2) - 15.5 - (16.4)	密 ～2mm 石英・長石・チャート・クサリ	黒 黒 5YR7/6	
36	Ⅷ13	Ⅷ版13	NR00 砂2	土師器 器台	(10.2) - (8.2) - *	密 ～2mm 石英・長石・チャート・クサリ	黒 黒 5YR6/6	
37	Ⅷ13	Ⅷ版13	NR00 砂2	土師器 器台	10.7 - 8.3 - 12.0	密 ～4mm 石英・長石・チャート・クサリ	黒 にぶい黄緑 10YR6/3	
38	Ⅷ13	Ⅷ版13	NR00 砂2	土師器 手拍子土器	幅 12.5 - 14.6 - 4.4	密 ～6mm 石英・長石・チャート・クサリ	黒 にぶい黄緑 10YR7/2	
39	Ⅷ14	Ⅷ版14	NR00 砂3	土師器 甕	(15.6) - (5.0) - *	密 ～3mm 石英・長石・チャート・角閃石	黒 にぶい黄緑 6/3	
40	Ⅷ14	Ⅷ版14	NR00 砂3	土師器 甕	(14.6) - (12.3) - *	密 ～3mm 石英・長石・チャート・クサリ	黒 にぶい黄緑 10YR6/3	
41	Ⅷ14	Ⅷ版14	NR00 砂3	土師器 甕	15.4 - 19.0 - *	密 ～4mm 石英・長石・チャート・クサリ	黒 にぶい黄緑 10YR6/2	
42	Ⅷ14		NR00 砂3	土師器 甕	(15.3) - (6.7) - *	密 ～3mm 石英・長石・チャート・クサリ	黒 にぶい黄緑 7.5YR6/4	
43	Ⅷ14	Ⅷ版14	NR00 砂3	土師器 甕	(16.0) - 7.3 - *	密 ～1mm 石英・長石・チャート	黒 にぶい黄緑 10YR5/3	
44	Ⅷ14		NR00 砂3	土師器 甕	(17.8) - (5.4) - *	密 ～2mm 石英・長石・チャート・クサリ	黒 にぶい黄緑 10YR6/3	
45	Ⅷ14	Ⅷ版14	NR00 砂3	土師器 甕	* - (2.5) - *	密 ～3mm 石英・長石・チャート・雲母	黒 にぶい黄緑 10YR6/3	
46	Ⅷ14		NR00 砂3	土師器 甕	* - (3.3) - 3.8	密 ～4mm 石英・長石・チャート・クサリ	黒 にぶい黄緑 10YR6/3	
47	Ⅷ14	Ⅷ版14	NR00 砂3	土師器 高杯	(12.8) - (4.6) - *	密 ～4mm 石英・長石・チャート・クサリ	黒 にぶい黄緑 10YR6/3	
48	Ⅷ14	Ⅷ版15	NR00 砂4	土師器 甕	(15.0) - (4.5) - *	密 ～3mm 石英・長石・チャート・雲母・ 角閃石	黒 にぶい黄緑 10YR5/4	
49	Ⅷ14	Ⅷ版15	NR00 砂4	土師器 甕	* - (3.9) - 5.4	密 ～5mm 石英・長石・チャート・雲母・ 角閃石	黒 にぶい黄緑 10YR5/3	
50	Ⅷ14	Ⅷ版15	NR00 砂4	土師器 甕	(14.6) - (8.9) - *	密 ～4mm 石英・長石・チャート・クサリ	黒 にぶい黄緑 5YR6/4	
51	Ⅷ14		NR00 砂4	土師器 甕	* - (3.3) - 3.3	密 ～4mm 石英・長石・チャート	黒 にぶい赤黒 5YR5/4	
52	Ⅷ14	Ⅷ版15	NR00 砂4	土師器 甕	* - (3.5) - 3.6	密 ～3mm 石英・長石・チャート・クサリ	黒 黄緑 10YR6/2	
53	Ⅷ14	Ⅷ版15	NR00 砂4	石器 石鏝	(4.2) - 1.3 - 0.8 - 3.6g		サマカイト	
54	Ⅷ17	Ⅷ版16	SBO40d 板方	土師器 椀	* - (2.4) - *	密 ～4mm 石英・長石・チャート・クサリ	黒 黒 5YR6/6	板 A
55	Ⅷ17		SBO40a 板反	須恵器 磁	* - (1.6) - *	中々粗 ～1mm 石英・長石	黒 灰白 N7/0	様 B 磁
56	Ⅷ17	Ⅷ版16	SBO40a 板反	須恵器 磁	(12.0) - (6.9) - *	中々粗 ～1mm 石英・長石・黒色粒	黒 灰白 N8/0	
57	Ⅷ17	Ⅷ版16	SBO40e 法肥砂	須恵器 磁	* - (3.0) - *	密 ～1mm 長石・微小黒色粒	黒 灰 N6/0	
58	Ⅷ18		SBO40j 磁板	木製品 磁板	33.4 - 43.3 - 12.8		コウヤヤキ	板目取
59	Ⅷ18	Ⅷ版16	SBO40d 磁板	木製品 磁板	32.5 - 49.4 - 10.2		ヒノキ	板目取
60	Ⅷ18		SBO40g 磁板	木製品 磁板	17.4 - 43.8 - 6.0		ヒノキ	板目取

表4 報告遺物一覧(3)

報告 番号	押図	写真 図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径・器高・底径 (cm)		胎土・素材	焼成・色調	特記事項
					残存率				
61	図18	図版17	SBO40a	木製品 礎板	25.2 - 48.9 - 7.4		ヒノキ		板目取
62	図19		SD017	土師器 高杯	* - (4.9) - *	杯部片	中々粗 ～ 4mm 長石・クサリ礫	良 橙 7.5YR6/6	
63	図19	図版17	SD043	土師器 皿	(10.5) - 2.0 - *	20%	中々粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 7.5YR7/6	
64	図19	図版17	SD009	土師器 皿	* - (1.9) - *	臼鉢部片	中々粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 7.5YR6/6	
65	図19	図版17	SD030	瓦器 椀	* - (2.1) - *	臼鉢部片	中々粗 微小砂粒	良 灰 N6/0	
66	図19	図版17	SD028	輸入磁器 白磁皿	* - (2.1) - *	臼鉢部片	滑 微小黒色粒	良 白 N9/0	
67	図20	図版17	灰土	石器 石鐮	4.2 - 2.65 - 0.5 - 3.9g		サヌカイト		

表5 検出遺構および出土遺物一覧(1)

5 番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
1			表掘溝		土師器(中世～)細片、瓦器類	A3～B3
2			表掘溝		弥生土器細片	B2・3～C2・3
3			表掘溝		弥生土器細片、土師器(古代)細片、瓦器類	A2～C2
4			表掘溝		土師器(古代)細片、須恵器(古代)細片	B2～D2
5			表掘溝		土師器(古代)細片	C2～D2
6			表掘溝		弥生土器類、古式土師器類	C3～D3
7			表掘溝		弥生土器類、土師器(古代)細片、須恵器(古代)類	B3～C3
8			表掘溝		須恵器(古代)壺・甕	A4～C4
9	SD009		表掘溝		土師器(古代)細片、土師器(中世～)皿	A4～C4
10			表掘溝		古式土師器類、土師器(中世)皿、須恵器(古代)類	A4～C4
11			表掘溝		弥生土器壺・甕	A4～D4
12			表掘溝		弥生土器細片	A4～C4
13			表掘溝		古式土師器類、瓦器類	B4～D4
14			表掘溝		弥生土器壺・甕・鉢	A4～D4
15			表掘溝		土師器(古代)細片	B4～C4
16			表掘溝		弥生土器細片	B4～C4
17	SD017		表掘溝		古式土師器類・高杯	C4～D4
18			表掘溝		弥生土器細片	B4～D4
19			表掘溝		弥生土器細片	C4
20			表掘溝	南北	土師器(古代)細片、須恵器(古代)細片	D2～D5
21			表掘溝	南北	弥生土器細片	D2～D5
22			表掘溝	南北	古式土師器壺・甕、須恵器(古墳)杯・甕	C3～C4
23			表掘溝	南北	弥生土器壺、土師器(古代)細片、須恵器(古代)壺	A5～D4
24			表掘溝	南北	弥生土器壺、須恵器(古代)杯	D2～D5
25			表掘溝		弥生土器壺・甕、土師器(古代)細片、須恵器(古代)類	C5～F5
26			表掘溝		弥生土器細片、須恵器(古墳)甕	D4～G4
27			表掘溝		弥生土器細片、土師器(古代)細片	A3～G3
28	SD028		表掘溝		土師器(古代)細片、須恵器(古墳)壺・甕、輸入白磁類	E3～G3
29			表掘溝		土師器(古墳)細片、土師器(古代)杯	D3～E3
30	SD030		表掘溝		土師器(中世)細片、瓦器類	E3～G3
31			表掘溝	南北	弥生土器細片	F4～F5
32			表掘溝		弥生土器細片、古式土師器細片	D4～G4
33			表掘溝		古式土師器細片	F4～G4
34			表掘溝	南北	土師器(古代)細片	D3～D2
35			表掘溝	南北	弥生土器細片	C2～D2
36			表掘溝			B2～C2
37			ビット		弥生土器細片	F3
38			表掘溝	南北	弥生土器類	F4
39			表掘溝		土師器(古代)細片、土師器(中世)皿	F4～H4
40	SB040		掘立柱建物	S-48～49、51～59、61		B～G2～5
41			表掘溝		弥生土器細片、土師器(古代)細片	F5～H5
42			表掘溝	南北	弥生土器細片、土師器(古墳)壺	H4～H5
43	SD043		表掘溝	南北	古式土師器壺・甕、土師器(中世)皿	I4～I5
44	SA050a		ビット		古式土師器類	E2
45	SA050b		ビット			D・F3
46	SA050c	掘方	ビット		古式土師器細片	D4
	ビット			古式土師器細片	D4	
47	SA050d		ビット		D4	
48	SB040b		ビット		古式土師器細片	E3
49	SB040c		ビット		木製品・礎板	E3
50	SA050		柱列	S-44、45、46、47		B～E2～4
51	SB040j		ビット		古式土師器細片、木製品礎板	E4
					古式土師器細片、木製品礎板	
52	SB040a	掘方 採取	ビット		古式土師器細片	E4
	ビット			弥生土器細片、土師器(古代)細片、須恵器(古代)壺・甕、白磁類		
53	SB040g		ビット		古式土師器細片、木製品礎板	F3
54	SB040k		ビット		木製品・礎板	F4
55	SB040b		ビット		木製品・礎板	F4
56	SB040f		ビット		木製品・礎板	F3
57	SB040i		ビット		弥生土器細片、須恵器(古代)壺	F4
58	SB040c		ビット			F4・5
59	SB040e		ビット		古式土師器細片、須恵器(古代)壺?	G4
					弥生土器壺・甕・鉢・高杯、古式土師器壺・器台、磁石、不明土製品、鏡核	
					弥生土器細片、古式土師器高杯	
					古式土師器壺・脚部、土師器(古墳)壺・高杯	
					弥生土器壺・甕・鉢・手取型土器、古式土師器高杯・器台、土師器(古墳)壺	
					弥生土器壺・甕・高杯・椀、古式土師器器台	
					弥生土器壺・甕、石蓋	
					弥生土器壺・甕・鉢、古式土師器壺・甕	
					弥生土器類	
					弥生土器細片、古式土師器壺、土師器(古代)細片、須恵器(古代)細片・甕、木製品礎板	
61	SB040d	掘方	ビット		土師器(古代)杯、須恵器(古代)壺	G4
	ビット			土師器(古代)細片	H5	

表 6 検出遺構および出土遺物一覧(2)

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
63			土坑	S-60 掘削中に検出 黒曜シルト下	古式土師器片	B4
64			ピット		古式土師器細片	F4
65			ピット			F3
66			ピット			H5
67			ピット	遺物なし		H5
68			ピット	遺物なし		H5
69			ピット	遺物なし		F4
70	S3070		竪穴建物		弥生土器片	E4 ~ F3
71			ピット		弥生土器片	F4
72			ピット		弥生土器細片	F4
73			ピット	S-65 下の遺構		F3
		表土			弥生土器器・片・高杯、古式土師器片、土師器(中世)類、須恵器(古墳)蓋、 須恵器(古代)器・片(A・B)、瓦器片、石鏝	

写真図版



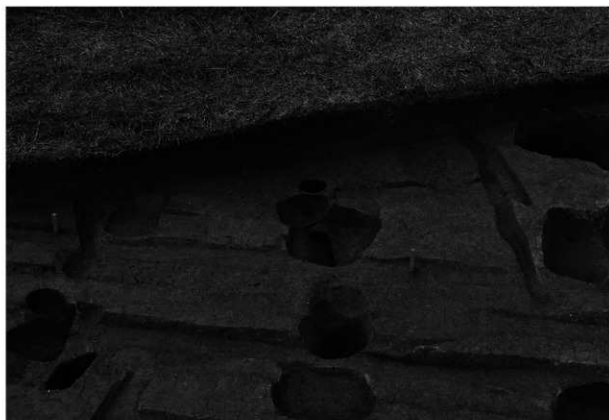
遺構検出状況（西から）



素掘小溝完掘状況（西から）



遺構完掘状況（西から）



S1070 完掘状況（南から）



SI070 土層断面 (南から)



SA050 全景 (南から)



NR060 全景（南西から）



NR060 東側断面（西から）



NR060 南側断面東側（北から）



NR060 南側断面西側（北から）



SB040 全景（南から）



SB040 完掘状況（南から）



SB040 柱穴 d 土層断面（北東から）



SB040 柱穴 j 礎板出土状況（北から）

図版 8

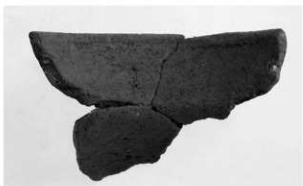
SI070 (1)



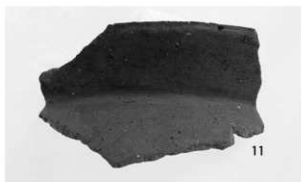
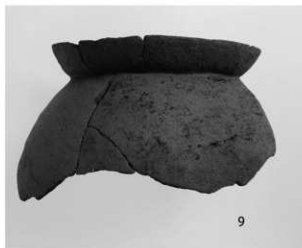
SA050 (2)



NR060 (3 ~ 5・7)

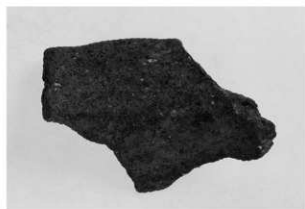
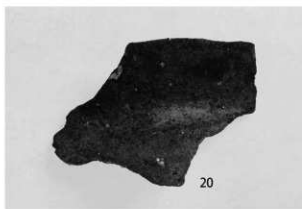
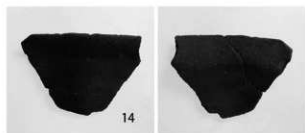


NR060 (8~12)



図版 10

NR060 (13 ~ 15 · 17 · 18 · 20)



NR060 (21・22・24～27)



21



22



24



27



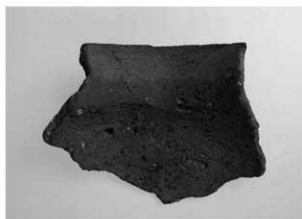
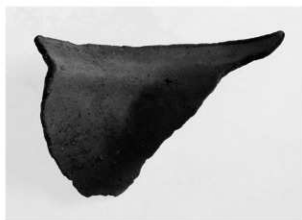
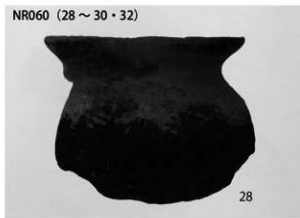
25



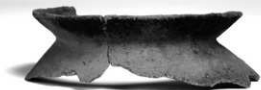
26



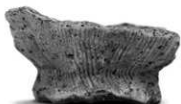
NR060 (28 ~ 30 · 32)



NR060 (31・33~38)



31



34



33



35



36

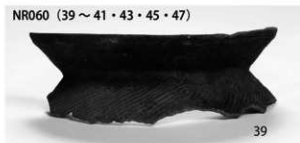


37

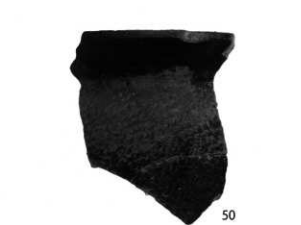
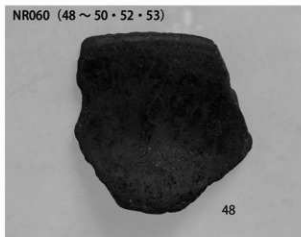


38

NR060 (39 ~ 41 · 43 · 45 · 47)

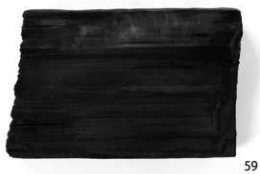
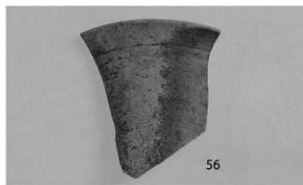


NR060 (48 ~ 50 · 52 · 53)



图版 16

SB040 (54 · 56 · 57 · 59)



SB040 (61)



61



素掘小溝 (63~66)



63



64



65



66



表土 (67)



67



報告書抄録

ふりがな	ふじわらきょうさきょうにじょうよんぼう、であい・かしわでいせき							
書名	藤原京左京二条四坊、出合・膳夫遺跡							
副書名	平成 29 年度発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	村田裕介・木沢直子							
編集機関	公益財団法人 元興寺文化財研究所							
所在地	〒 630-8312 奈良市中院町 11 番地						Tel 0742-23-1376	
発行年月日	西暦 2019 年 3 月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	***	***	調査期間	㎡	調査原因
<small>よつからきょうとうとあい</small> <small>ふじわらきょうさきょうにじょうよんぼう</small> 藤原京跡（左京二条四坊） <small>であい</small> <small>かしわでいせき</small> 出合・膳夫遺跡	<small>ふじわらきょうさきょうにじょうよんぼう</small> 橿原市騎天町 634-2-1	29205		34° 30' 30"	135° 49' 00"	20170821 ～ 20170915	160.24㎡	店舗建設
	種別	主な時代		主な道構		主な遺物		特記事項
郡城跡 集落跡	弥生時代～京町時代		型穴建物 櫓 自然流路 掘立柱建物 ほか		土器 石製品 木製品			
要約	弥生時代から古墳時代と考えられる型穴建物、櫓、自然流路、藤原京期の掘立柱建物などを検出した。藤原京期の掘立柱建物の柱穴からは礎石が出土し、当該期における木材利用の様相が明らかになった。							

藤原京左京二条四坊
出合・膳夫遺跡

—平成29年度発掘調査報告書—

2019.3.31

(発行・編集) 公益財団法人 元興寺文化財研究所

(印刷) 株式会社 明新社